

大学生の本来感と対象関係および 自己受容・他者受容との関連

新 井 和 法

要 旨

大学生という時期は日本では多くの場合が最後の学生としての時期を過ごす期間である。大学卒業後には環境・対人関係も大きく変わってくると考えられる。

そのような中でどのように生きるか等は“自分らしくある感覚”が保持できているか否かが自分自身の在りかたを決め、多くの活動の場面において自身の活動を円滑に進めるための一つの指標となるのではないかと考えられる。

本研究は、伊藤・小玉（2005）によって「自分自身に感じる中核的な本当らしさの感覚の程度」と操作的に定義された本来感尺度を用いて、自己受容と他者受容と、その重要な関係性はどのような形のものかに焦点を当て、行った。その結果、自己受容と本来感の間での強い関連が示唆され、自己受容ができていものの方が本来感も高くなり、他者との関係性においても安定した関係性が築け、ある程度自己をその関係性において自由に出せているということが本来感を高めるといったことが示唆された。

Key Words : 本来感・対象関係・青年期・自己受容・他者受容

I. はじめに

日本において、大学生時期というのは自己決

定の重要な期間であると考えられる。大学全入時代と言われる現代において、自身がどのような進路に進み、大学への進学を決定した際、その学生生活の中での決定をどのようにしていくのか、自身のその後の自立も含め、この時期に大きな選択をすることは少なくない。

大学生という時期は日本では多くの場合が社会にでる以前の最後の学生としての時期を過ごす期間である。それまでの小・中・高などのこれまでの学内での交友関係も含め、自身がそれまでにどのように他者と関わってきたのか、その繋がりがたや頻度はどの程度のものかなども、社会に出る依然と出てからで大きく変わってくると考えられる。学友として共に過ごしてきた友人と、社会に出て同僚として他者と知り合い、付き合うということは、これまでの関係とは大きく異なってくると考えられる。今まで自分自身が他者とどのように接してきたか、その中で自分自身がどのように在ったかを自分の中で保持していけることが大きく変容する環境において、その後様々な場面で活動するに当たり大きな役割と果たすと考えられる。

ことに、近年では電子機器でのやり取りの場面も増え、大きく他者との繋がりがたも変容してきた。顔や声も知らない他人と手近な端末で即座にやり取りができ、他者との繋がりが実際に会うといった機会のみにも留まらず、いつ何時でも他者と繋がれるようになったこの時代においてどのように他者と接し、その中でどのように生きるか等は“自分らしくある感覚”が保持

できているか否かが自分自身の在りかたを決め、多くの活動の場面において自身の活動を円滑に進めるための一つの指標となるのではないかと考えられる。

Ⅱ. 問 題

エリクソン (Erikson, E. H. 1959) によれば、青年期はアイデンティティの確立の時期であるとされている。大学生はそのアイデンティティ確立の時期にあたる中でも社会に出る準備期間として、猶予をもつ特別な期間であると考えられ、特殊な立ち位置に属していると言える。日本において、大学生の自己決定はそのまま就職に繋がることも多く、ここでアイデンティティが確立されていくことは非常に大きな意味があると考えられる。

大学生時期においては、それ以後に対しての大きな決定といえるであろう就職、あるいは進学かといった、社会へ進むか否かが決まるという大きな決定ともいえる進路にも関係する事から、それまで以上に自分自身にも向き合う必要があると考えられる。そのためアイデンティティの確立が進んでいくのではないかと考えられる。女子大学生を対象に、行われた高木ら (1986) による研究では、同一性拡散群においては自尊感情の得点が有意に低くなっているとの報告がなされており、アイデンティティの拡散は、自尊感情の低下を招くと考えられる。また、伊藤・小玉 (2005) による本来感と well-being の関連をみる研究において、本来感と自我同一性の併存的・因子的妥当性をみた分析で中程度の相関がみられ、異なる因子構造がより当てはまりの良いモデルであったとしている。これらの事から自尊感情と本来感は近いものでありながらも異なったものとして併存していると考えられ、また、このことから自尊感情・アイデンティティ・本来感における関連性は存在しているものと考えられ、アイデンティティが確立していきにしたがって、本来感も高くなることが予想される。

本来感とは、高い自尊感情にあるとされる適応的なものと、不適応的なもののうち、適応的な自尊感情を指す。適応的な自尊感情とは、不適応的な自尊感情は自己価値が社会的な成功の有無など、外的な基準に左右されるのに対して、自分自身の内的な感情であり、外的な基準には左右されない。伊藤・小玉 (2005) は本来感の定義を「自分自身に感じる中核的な本当らしさの感覚の程度」と操作的に定義し、その尺度を作成した。本研究においてもこの定義を採用し、本来感とする。

本来感と自尊感情が異なる影響を与えているという事の一つとしては、伊藤・小玉 (2005) による本来感と自尊感情が well-being に与えている影響をみる研究が挙げられる。well-being の下位因子において、本来感は、人生に対する満足以外 (抑うつ・不安・人格的成長・人生における目的・自律性・積極的な他者関係) に正の影響をあたえ、自尊感情は、抑うつ・人生に対する満足・人生における目的・自律性に対して有意に影響を与えており、自律性に対してのみ負の影響を与えたとしている。このことから、本来感は自尊感情に比べ、より well-being に広く影響を与えていると考えられる。自尊感情は自律性を低下させ、他者との関わり合いを促進させるなどの機能はないのに対し、本来感では自律性を高め、他者との関わり合いとの関連があると考えられる。本来感と他者との関わり合いとの関連をみた他の研究の一つとして、益子 (2010) による過剰な外的適応行動と内省行動が本来感におよぼす影響をみた研究が挙げられる。同研究において、本来感に対し過剰適応の内の自己抑制が負の相関を、よく思われたい欲求が正の相関を示したとしており、自己内省は弱い正の相関を示したとしている。このような結果から、自身をよく思われたい欲求と共に他者関係を積極的に持つ傾向が本来感に影響を与えていると考えられ、また、他者との関係をどう持つか、どのように関わっているかといったことの方が、自己に対する内省よりも、より大きな関連があると考えられる。本来

感は自律性を高めるということから、他者と融和的になるのではなく、自身を自身として受け止め、そのうえで他者に認められるよう自身を方向づけする影響を与えているのではないかと考えられる。また、他者との関わり合いにおいてどのように自身を表せるか、または他者をどのように受け止めるかにおいては、自身に対する受容や、他者に対する受容が関係してくるであろうと考えられる。

櫻井（2013）が女子大学生を対象に行った、自己受容・他者受容のアンバランスさと精神的健康の関係のみた研究において、全ての群間で有意に差があり、自己受容・他者受容高群＞自己受容高群・他者受容低群＞自己受容低群・他者受容高群＞自己受容・他者受容低群の順に精神的健康が高いとの結果がでており、自己受容と他者受容のバランスにより差異があることが示された。また、同研究において、自己受容と他者受容は低い相関を示し、自己受容と精神健康は中程度の負の相関（低得点が精神健康が高い）を示し、他者受容と精神健康では低い負の相関を示したとしている。精神的な健康を保つためには自己の受容、並びに他者の受容が必要であることが示唆されたと言える。また、自己受容と他者の関連を取り扱った研究として、山田・岡本（2006）による青年を対象とした自己による自己受容と他者を通しての自己受容の研究がある。この研究では、自分自身が自分に対し受け入れる感覚である自己受容と、他者に受容されることを通して自身を受けいれられるようになるという自己受容を、自己による自己受容と他者を通しての自己受容とに分け、研究を行った。この研究によれば、自己による自己受容・他者を通しての自己受容の両尺度が受容してくれる他者の存在と自尊感情の両尺度に優位に弱い正の相関を示したとしている。また、全ての相関において、多少ではあるが他者を通しての自己受容よりも、自己による自己受容が強く相関を示したとの結果がでており、自身が他者に受け入れられているという感覚よりも、自分自身を受けいれられる感覚を持つ者の方がよ

り受け入れてくれる他者の存在があるという感覚をもち、自尊感情も高まるということが示唆されている。

対象関係の形と他者の関係性に関する研究として鶴田ら（2015）の青年期の対象関係と自己表明行動に関する研究がある。この研究において、対象関係尺度の内の親和不全因子と回避的自己表明行動の間に中程度の正の相関、希薄な対人関係因子と回避的自己表明行動の間に弱い正の相関がみられ、一体性の過剰希求と婉曲的自己表明・見捨てられ不安因子と婉曲的自己表明行動の間に弱い正の相関がみられ、希薄な対人関係とアサーティブな自己表明行動との間に中程度の正の相関がみられたとした。また、関係満足度と希薄な対人関係因子との間に有意な中程度の負の相関がみられ、アサーティブな自己表明行動と関係満足度の間に中程度の正の相関が、回避的自己表明行動と関係満足度との間に有意な弱い負の相関がみられたと報告されている。

このことから、他者との関係の持ちづらさ、親密性が低いことは率直に自身の考えを述べることと関連があると考えられ、他者関係が親密である者ほど自身の意見を言えるという関係性があることが示唆された。また、アサーティブで回避的でない自己表明ができるほど関係満足度が高いということから、他者全体と向き合い、他者の意見を吟味し、それに対して自身の意見を言えるといった、他者そのものの考えを受け止めることが必要であると考えられる。

以上のことから、自分自身を受けいれられるということや他者を受けいれられること、他者との関係性が安定しているということは自分が自分らしくあるという感覚を強めることにも繋がり、自分らしくあるという感覚が高まることは、人格的成長や精神的健康を助長する役割があると考えられる。そのような感覚を高めるには、自身の内的なもののみでなく、他者が自身に対してどのように関わっているか、どのような関係性であるか、その関係性を自身がどう受け止め、それに対しどうアプローチをしているか

といったことが非常に重要であると考えられる。

Ⅲ. 目 的

上記の事から、自分らしくある感覚は自身や他者を受容することの他に、他者とどのような関係性を築いてきたかによる影響を受けている可能性が考えられる。また、他者関係において、よく思われたい欲求を抱くということは、その対象が存在しているという前提が考えられ、時には向き合う機会もある、ある程度親密な者の存在が考えられる。

本来感と自己受容・他者受容・他者関係の関連として、自分が自分らしくいられるという感覚は、他者と自身の対比が必要であると考えられる。他者の存在があり、自身との摩擦があったうえで、自身が他者と別の存在としてそこに在り、それを自分自身であると認められることが、自分が自分らしくあるという感覚を高めるのではないかと考えられる。他者を受容し、他者の個別性を認め、他者との関係性を見つめ、自身がその他者より良い関係を築けることによって、他者と自分が別の存在であり、自分も他者もそのままの存在でいいのだと感じられることが本来感を高めることに繋がると考えられる。しかし、その本来感との関連において、自身をどのような形で受容しているのか、他者とのような関係性を築いているのかをみた研究は行われていない。

本研究では、本来感はどのような他者関係との関連が強いのか、また、そのなかでの他者と自身の受容の関連やその形はどのようなものであるかの関連を検討していくことを目的とする。

自身のあるがままの姿を認め、自身を受けいれることができるという状態、他者を受けいれ、他者との関係性の不安定さに耐え（あるいは安定性を増し）、自分自身を他者との関係性においても表出できることが常に自分らしくあるという感覚に繋がる可能性が考えられ、また、先行研究から、他者受容と自己受容の働きは似通ったところが多いと考えられ、程度の違

いはあれど影響は同様に示すと考えられる。このようなことから本研究における仮説は以下の通り示す。①本来感は対象関係の各因子から負の影響を、自己受容の各因子・他者受容から正の影響を受けている。②本来感は自己受容・他者受容と正の相関関係を示す。③対象関係は本来感・自己受容・他者受容と負の相関を示す。

Ⅳ. 方 法

1. 調査対象および調査時期

調査は都内および埼玉県の私立大学に通う大学生を対象に、質問紙のフェイスシートにて、回答の有無により不利益は起こらないという趣旨の注意書きと、質問紙に対して協力するかどうかの同意・不同意を選択してもらい学部・学科・学年・性別を記入したうえで無記名・個別記入方式の質問紙を配布し、授業終了時に20～30分程度の質問紙回答記入時間をもらい、質問紙の配布・回収を即日で行った。回答は欠損値が認められたものを除き使用した。総回答数は276名、有効回答数220名（有効回答80%、男性97名、女性123名、年齢平均19.8歳）であった。

調査機関は平成27年9月～同年10月である。なお、期間は総データ取得までの期間であり、質問紙配布から回収までは同日内に行われた。

2. 質問紙

A. 対象関係尺度

対象関係の測度として、井梅ら(2006)によって作成された青年期用対象関係(以下対象関係)尺度を使用した。「私は、人とどうやって会ったり話したりしていいのかわからない」「私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないところがある」など6項目からなる「親和不全因子」、 「本当の自分を理解してくれていると思える人がいる」「私には、ほんとうに困ったとき、助けてくれると思える人がいる」など5項目からなる「希薄な対人関係因子」、 「人を思い通りに動かすのは、私の密かな楽しみであ

る」「私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある」など5項目からなる「自己中心的な他者操作因子」, 「親しい人とは、何をするにも一緒に行動をしないと気が済まない」「親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい」など6項目からなる「一体性の過剰希求因子」, 「何かにつけて置いてきぼりにされそうで、よく心配になる」「ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくことがある」など7項目からなる「見捨てられ不安因子」の5つの因子からなり、計29項目で構成され、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの6件法で回答を求めた。

B. 自己受容尺度

自己受容の測度として、櫻井（2013）によって作成された自己受容尺度を使用した。「現在の自分を受けいれている。」「良いところも悪いところも含めてこれが自分だと思える。」など7項目からなる「全体としての自己受容因子」, 「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる。」「自分の素敵などころを素直に良いと思える。」など7項目からなる「望ましい自己の受容因子」, 「これまでの人生をやり直したい。」「全体として自分のことが受けいれられない。」など5項目からなる「現状満足因子」の3つの因子からなり、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

C. 他者受容尺度

他者受容の測度として、櫻井（2013）によって作成された他者受容尺度を使用した。「他人の喜びを素直に喜べない。」「他人の長所を素直に認めることができる。」など17項目からなり、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

D. 本来感尺度

本来感の測度として、伊藤・小玉（2005）による本来感尺度を用いた。本来感を感じている個人の状態を記述した「いつも自分らしくいられる」「いつでも揺るがない「自分」をもって

いる」など7項目からなり、「当てはまる」から「あてはまらない」の5件法で評定を求めた。

E. 分析方法

対象関係尺度および自己受容尺度は因子構造を有し、因子構造をもつため、確認的因子分析を行い、各因子の信頼性の検定を行った。その後、本来感尺度・他者受容尺度・自己受容尺度・対象関係尺度の相関分析を行った。なお、因子構造のあるものは、尺度ごと・因子ごとに相関分析を行った。本来感に対し自己受容・他者受容および対象関係からの影響が予想されるため、独立変数を自己受容・対象関係の各因子・他者受容とし、本来感を従属変数においた重回帰分析を行った。また、本研究においては、全ての質問項目が得点が高いものが低い数値（1があてはまるなど）となっているため、逆転項目以外に逆転処理を行って分析を行った。なお、本研究においては、対象関係の総得点は、他者関係との総合的な不安定さの一つの指標として算出し、分析にも用いるが、主眼は各因子との関連における検討とする。

V. 結果

1. 対象関係尺度因子分析結果

対象関係尺度は5因子の因子構造を持つため、これを確認するため因子分析を行った。分析方法は先行研究にならい、最尤法・プロマックス回転で5因子を仮定し分析を行った。その結果、負荷量を.35未満で切り、採択した際に質問項目が先行研究と同じ因子構造を示した。また、5因子構造での累積%は56%であった（表1）。

A. 親和不全因子

I 因子は、因子負荷量順に「私は人となかなか親しくなれない」「私は、人とどうやって会ったり話したりしていいのかわからない」「私は自分の心に壁を作ってしまい、周りをよせつけないところがある」「人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い」「私は他人と深くつき合う事を恐れている」「私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまうと

表1 対象関係尺度 因子負荷量

N=220	I	II	III	IV	V
3. 私は人となかなか親しくなれない	.899	-.103	.051	-.004	.005
1. 私は、人とうやうや会ったり話したりしていいのかわからない	.893	-.145	.136	-.041	-.051
2. 私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないところがある	.801	.053	-.097	.084	-.072
5. 人のそばにいると、緊張して落ち着かないことが多い	.752	.067	.083	.079	-.072
4. 私は他人と深くつき合うことを恐れている	.650	.144	-.018	-.071	.056
6. 私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまうところがある	.430	.210	-.208	.299	-.158
29. 私は他人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい	.036	.842	-.096	.066	-.123
26. 親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく	-.151	.833	-.029	.029	-.020
25. 私は人と接する時、人の顔色をととても気にする	.012	.774	-.085	-.031	-.083
27. 身近な人が私以外のものに気をとられたら、拒絶された感じがして傷つく	-.149	.663	.192	.005	.087
24. ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくところがある	.225	.634	.109	-.110	.016
28. とても親しい相手であっても、いつか裏切られるのではという不安を感じることがある	.075	.553	.165	-.073	.194
23. 何かにつけて置いてきぼりにされそうで、よく心配になる	.253	.538	.175	-.081	-.015
17. 親しい人とは、何をしても一緒に行動をしない気が済まない	.177	-.280	.917	-.022	-.046
21. 私は誰に誰かといっしょにいないと不安である	-.019	.136	.700	-.150	-.010
19. 私は完全に一心同体になれる人を求めている	.003	.166	.582	.055	-.020
20. 私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである	-.126	.164	.575	.181	-.101
22. 母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ	.004	.063	.524	.154	-.056
18. 親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい	-.036	.258	.432	-.041	-.127
13. 私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある	.126	.104	-.150	.801	-.121
12. 人を思い通り動かすのは、私の密かな楽しみである	.007	-.046	-.077	.788	-.069
14. 自分が思う通りに人の気持ちを仕向けていくことが、人とのつきあいで重要なことである	-.006	-.159	.207	.683	.003
15. 自分の欲望を満たすために、人を利用することは悪いことではないと思う	.009	-.021	.023	.605	.151
16. 人との関係で私が重点を置くことは、常に相手より優位な立場になることである	-.075	.060	.285	.541	.126
8. 私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる	-.085	-.059	.009	-.021	.974
7. 本当の自分を理解してくれていると思える人がいる	-.166	.015	-.054	.088	.871
10. 私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている	.337	-.190	.032	.007	.508
9. 私は親しい人（家族や恋人、親友など）に自分の要求を適切に伝えることが出来る	.256	.122	-.106	-.118	.455
11. 友人関係は比較的安定している	.328	.004	-.072	-.074	.445

ころがある」の6項目からなる他者と親しくい
ることに対するの難しさや関係性の構築の困難
さや緊張を表している「親和不全因子」。最も
低い負荷量を示したもので.430であり、他因
子にまたがって.35以上を示したものはなかつ
た。また、同因子の信頼性をみるため、
Cronbachの α 係数（以下 α 係数）を算出した
ところ、 $\alpha = .891$ と問題のない値となった。

B. 見捨てられ不安（見捨て不安）因子

II因子は因子負荷量順に「私は他人からの否
定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやす
い」「親しい人に自分の考えを否定されるとひ
どく傷つく」「私は人と接する時、人の顔色を
とても気にする」「身近な人が私以外のものに
気をとられたら、拒絶された感じがして傷つ
く」「とても親しい相手であっても、いつか裏

切られるのではという不安を感じることはあ
る」「ひょっとして大切な人から拒絶されるの
では、という恐れをいだくことがある」「とて
も親しい相手であっても置いてきぼりにされそ
うで、よく心配になる」の7項目からなる親し
い他者との関係性に対する拒絶、取り残される
不安を表す「見捨てられ不安（以降見捨て不安）
因子」である。同因子内において、最も低い負
荷量を示したものは.538で、他因子への.35以
上の重複はみられなかった。また、 α 係数を算
出したところ $\alpha = .894$ と、問題のない数値と
なった。

C. 一体性の過剰希求（一体希求）因子

III因子は負荷量順に「親しい人とは、何をす
るにも一緒に行動しないと気が済まない」「私
は常にだれかといっしょにいないと不安であ
る」「私は完全に一心同体になれる人を求めて
いる」「私を本当に想ってくれる人なら、私の
要求をすべて受け入れてくれるはずである」
「母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ」
「親しい人には、自分を“100%”受け入れても
らいたい」の5項目からなる他者との心理的距
離の過度の近さを表す「一体性の過剰希求（以
下一体希求）因子」である。同因子内で最も低
い負荷量は.432で、他因子への.35以上の重複
はみられなかった。また、 α 係数を算出したと
ころ $\alpha = .838$ と十分な数値であった。

D. 自己中心性（自己中心因子）因子

IV因子は負荷量順に「私には、欲求を満たそ
うとして、自分の思い通りになるよう相手を仕
向けるところがある」「人を思い通り動かすの
は、私の密かな楽しみである」「自分が思う通
りに人の気持ちを仕向けていくことが、人との
つきあいで重要なことである」「自分の欲望を
満たすために、人を利用することは悪いこと
ではないと思う」「人との関係で私が重点を置く
ことは、常に相手より優位な立場になること
である」の5項目からなる自分が優れているとい
う独善的な思い、自分のために他者が動くこと
が当然と考える「自己中心性（以下自己中心）
因子」である。同因子内で最も低い因子負荷を

示したもので.541で、他因子への.35以上の重複はみられなかった。 α 係数を算出したところ $\alpha = .825$ であった。

E. 希薄な対人関係（関係希薄）因子

V因子は負荷量順に「私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる」「本当の自分を理解してくれていると思える人がいる」「私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている」「私は親しい人（家族や恋人、親友など）に自分の要求を適切に伝えることができる」「友人関係は比較的安定している」の5項目からなる。他者に対する評価が安定しない、相互理解、実質的な中身を伴う対人関係の交流の困難を表す「不安定で希薄な対人関係（以下関係希薄）因子」である。また、この項目はすべての項目が逆転項目であるため、本研究においては逆転処理を行わず研究を進めた。同因子内で最も低い負荷量を示したもので.445で、他因子への.35以上の重複はみられなかった。 α 係数を算出したところ $\alpha = .894$ と十分な値であった。

2. 自己受容因子分析結果

自己受容尺度は先行研究によって3因子の因子構造が確認されている。本研究においても同じ因子構造を持つかどうかを因子分析を行い確認した。分析方法は先行研究にならない、主因子法・プロマックス回転で3因子を仮定して行った。負荷量を.35を基準としてみたところ、第I因子に一項目.35に満たない項目があり、第II・第III因子に、他因子とまたがって負荷量が高かったものがあつたが、その因子に属する他の負荷項目の結果が先行研究と同じとなったため、今回は同因子として扱う事とした。結果は以下の通り（表2）である。

A. 全体としての自己の受容（全体的自己受容）因子

第I因子は負荷量順に「自分の弱いところも自分の一部として認めることができる」「人は人、自分は自分だと思える」「良いところも悪いところも含めてこれが自分だと思える」「現

表2 自己受容尺度 因子負荷量

N=220	I	II	III
15. 自分の弱いところも自分の一部として認めることができる。	.843	-.199	.088
8. 人は人、自分は自分だと思える。	.761	-.175	-.183
6. 良いところも悪いところも含めてこれが自分だと思える。	.736	-.020	.032
7. 現在の自分を受けいれている。	.716	.071	.144
13. ありのままの自分でよい。	.644	-.005	.092
1. 自分自身を受けいれている。	.460	.228	.081
18. 自分の不完全な部分にあまりとらわれない。	.319	.118	.152
19. 物事を成し遂げたとき、自分の努力を認めることができる。	-.083	.748	-.188
10. 物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる。	.196	.702	-.394
12. 自分が他者から高く評価されたとき、半信半疑になる。	-.282	.594	.350
16. 自分の優れている部分を受けいれている。	.262	.587	-.024
4. 自分の長所を素直に認めることができる。	.186	.565	.056
5. 他者から好意を持たれたとき、しっかりとしない。	-.273	.545	.104
9. 自分の素敵なところを素直に良いと思える。	.229	.515	.075
3. これまでの人生をやり直したい	-.025	.045	.713
11. 「今は違う自分だったらなあ」と思う。	-.001	.043	.668
2. 自分の欠点や弱点はできることなら捨て去ってしまいたい。	.122	-.272	.657
17. 過去の自分が気に入らない。	.067	.009	.520
14. 全体として自分のことが受け入れられない。	.095	.378	.395

在の自分を受けいれている」「ありのままの自分でよい」「自分自身を受けいれている」「自分の不完全な部分にあまりとらわれない」の8項目からなる自分自身を全体的に捉え、受容できるかといったことを表す「全体的な自己の受容（以下全体的自己受容）因子」である。本研究では同因子内で最も低い負荷量を示したものは.319と.35に達しなかったが、因子負荷を示している質問項目が先行研究と同一であったため、本研究においても同因子と定めて分析を続行する。 α 係数を算出したところ $\alpha = .834$ と十分な値であった。

B. 望ましい自己の受容（望自己受容）因子

第II因子は負荷量順に「物事を成し遂げたとき、自分の努力を認めることができる」「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる」「自分が他者から高く評価されたとき、半信半疑になる（逆転項目）」「自分の優れている部分をうけいれている」「自分の長所を素直に認めることができる」「他者から好意を持たれたとき、しっかりとしない（逆転項目）」「自分の素敵なところを素直に良いと思える」の7項目からなる、自分自身の望ましい事柄に関する「望ましい自己の受容（以下望自己

受容) 因子」である。同因子内で最も低い負荷量を示したもので.515で、他因子への.35以上の負荷は質問項目10「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる」(-.394)と、質問項目12「自分が他者から高く評価されたとき、半信半疑になる」(.350)と二項目みられたが、属する因子が先行研究と同様であり、負荷量が重複していた項目も二つと少なかったため採用し、信頼性を求めた。 α 係数を算出したところ $\alpha = .809$ と十分な値であったため、この因子を先行研究と同様に扱うこととする。

C. 現状満足因子

第Ⅲ因子は「これまでの人生をやり直したい」「今とは違う自分だったらなあ」と思う」「自分の欠点や弱点はできることなら捨て去ってしまいたい」「過去の自分が気に入らない」「全体として自分のことが受け入れられない」(すべて逆転項目)の5項目からなる、自分自身の変化を希望する項目の逆転からなる、現状のままではよいということを表す「現状満足因子」である。同因子内で最も低い負荷量を示したものは質問項目14「全体として自分の事が受け入れられない」の.395であった。また、同項目が第Ⅱ因子に高い負荷量を示し.378となっていたが、因子を構成する項目が先行研究と同一であったため、これを採用し、同因子として扱うこととする。 α 係数を算出したところ $\alpha = .713$ と他因子と比べると若干低くはあるが、問題となるほどの値ではなく、先行研究と同因

子として使える範囲であると判断した。

因子構造をもつ尺度は以上となり、全ての因子構造が先行研究通りで使って問題ないと判断した。

3. 相関分析結果

各尺度と各因子において相関分析を行った結果、以下の通りとなった(表3・表4)。

A. 尺度別相関分析結果

本来感と対象関係・他者受容・自己受容の相関関係をみた結果、全ての尺度間で $p < .01$ であり1%水準で有意であった。本来感と対象関係の間では-.430と中程度の負の相関が、他者受容と本来感の間では.181と弱い相関が、自己受容と本来感の間では.713と強い相関がみられた。対象関係と他尺度の間では、-.430～-.493と、どの尺度とも中程度の負の相関がみられ、対象関係の総得点を他者関係の不安定さの度合いとし、他者との関係性が安定しているものが、本来感・自己受容・他者受容が高まることを示唆したいえる。

自己受容と他者受容の相関においては、 $p < .01$ であり1%水準で有意に.262と弱い相関

表3 各尺度相関

N=220	本来感	対象関係	他者受容	自己受容
本来感	1	-.430**	.181**	.713**
対象関係	-.430**	1	-.451**	-.493**
他者受容	.181**	-.451**	1	.262**
自己受容	.713**	-.493**	.262**	1

** $p < .01$

表4 各下位尺度・他者受容・本来感相関

N=220	本来感	親和不全	関係希薄	自己中心	一体希求	見捨不安	全体的自己	望自己受容	現状満足
本来感	1	-.439**	-.378**	.063	-.106	-.414**	.624**	.582**	.599**
親和不全	-.439**	1	.481**	.131	.042	.441**	-.270**	-.459**	-.335**
関係希薄	-.378**	.481**	1	.107	-.049	.276**	-.255**	-.357**	-.231**
自己中心	.063	.131	.107	1	.265**	.194**	-.030	.067	-.081
一体希求	-.106	.042	-.049	.265**	1	.532**	-.228**	-.059	-.262**
見捨不安	-.414**	.441**	.276**	.194**	.532**	1	-.357**	-.323**	-.462**
全体的自己受容	.624**	-.270**	-.255**	-.030	-.228**	-.357**	1	.530**	.584**
望自己受容	.582**	-.459**	-.357**	.067	-.059	-.323**	.530**	1	.510**
現状満足	.599**	-.335**	-.231**	-.081	-.262**	-.462**	.584**	.510**	1
他者受容	.181**	-.264**	-.355**	-.364**	-.288**	-.236**	.272**	.212**	.161*

** $p < .01$ * $p < .05$

においても非常に信頼性の高い因子群となったと考えられる。

自己受容の先行研究で確認された因子は3つであり、「全体としての自己の受容」「望ましい自己の受容」「現状満足」の3つであった。本研究においても概ね問題はなく、こちらの因子構造も先行研究通りに使用するのに問題となるほどの値はでなかったが、因子構造において多少のブレが生じていた。

第Ⅲ因子における因子構造で特に目についたのは属すべき因子と異なる因子と属する因子とほぼ同等の負荷量を示した質問項目14についてである。14の「全体として自分のことが受け入れられない」（逆転項目）では、第Ⅱ因子の「望ましい自己の受容」に負荷量が高く算出され.395と.378と負荷量の差が.017の差と非常に小さいものとなった。これは、「自分を受け入れられない」という質問文に対し、現在の自分を受け入れないという事が、望ましい自分へ変化することに繋がる一端となっているためなのではないかと予想される。第Ⅱ因子では、第Ⅲ因子に負荷量が重複している項目が二つみられた。質問項目10の「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる」は-.394で、他因子へ高い負の負荷量を示している。また、重複していたもう一つの質問項目12「自分が他者から評価された時、半信半疑になる」も同様に.350で第Ⅲ因子に重複をしていた。第Ⅱ因子に属する項目で他の項目のものは概して第Ⅰ因子の「全体としての自己の受容」因子に負荷量が高めにでており、「望ましい自己」というものが自身を認めることを基礎とし、変容の間に在るという事が考えられる。信頼性 α の値も十分であったため、本研究では先行研究同様の因子として扱ったが、本研究においては2つの因子に高い負荷量を示した質問項目10・14は望ましい自己の受容・現状満足との関連性の高さが示唆され、項目の類似性が高いと考えられる。

2. 相関分析

A. 尺度別相関分析

尺度間の相関分析においては、全ての尺度で有意に相関関係を示していた。とりわけ本来感と自己受容は.713と強い相関を示し、自身を受容できることは本来感を高めることと密接な関係があることが考えられる。比して、他者受容は本来感との間に非常に弱い相関関係を示した。他者を受容できるということは、自分自身の受容に比べ自分らしさを感じることとの関連性は高く示唆された。

対象関係と本来感の相関においては、-.430と中程度の相関を示した。対象関係は、自己受容・他者受容においても中程度の負の相関を示した。また、わずかな差ではあるが最も強い相関関係を示したのは自己受容であった。他者と安定した関係性は、自分らしくあることや他者を受け入れることとの関連性も高く示されたが、関連の示された中でも自己の受容ができるものが他者との安定した関係性を持ちやすい傾向であることが示唆された。

B. 因子別相関分析

尺度別ではすべてが有意に相関関係を持っていたが、因子別でどのような関係性との関連が高いのかをみるために因子別で相関分析を行った。本来感と相関関係を持たない対象関係因子は「自己中心」と「一体希求」であった。対象関係因子で最も強い相関関係を示したものは「親和不全」で-.439であった。次いで-.414見捨不安、-.378「関係希薄」であった。また、自己受容の因子とはすべて強い相関関係がみられた。

「一体希求」の質問項目では「親しい人とは、何をするにも一緒に行動をしないと気が済まない」「私は完全に一心同体になれる人を求めている」「私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである」「母親なら、私の望みを叶えてくれて当然だ」といった、他者は自身に対してこうあるべきである、という願望・希望の提示がなされている質問項目が多くみられる。また、「自己中心」

では「人を思い通りに動かすのは、私の密かな楽しみである」「自分が思う通りに人の気持ちを仕向けていくことが人とのつきあいで重要なことである」「自分の欲望を満たすために、人を利用する事は悪いことではないと思う」など、自身が対象に対しどのような行動を起こすのかといった質問項目になり、この二つの因子において共通すると考えられる点では対象に対しての願望・希望などの対象への「望むこと」を表している質問項目が多いと考えられる。対して、相関のあった他の因子では「親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく（見捨不安）」「私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる（関係希薄）」「人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い（親和不全）」など、対象との間にある“不安や緊張”が関係していることが考えられる。このようなことから、本来感に対し関連性を示した群として、他者への欲求や願望よりも、他者との関係を築くこと自体に対しての不安・難しさや他者との関係上での不安・緊張が少ないような選択項目という傾向があり、本来感との関係性を示していたのではないかと考えられる。

このことから、相関分析の結果においては、本来感とは他者関係において、他者をコントロールしたい、他者と密接になりたいという願望よりも、新しい他者との繋がりを作ることへの不安、現在交流関係のある他者との関係性の不安や、見捨てられてしまうのではないかと、といった緊張状態と負の相関を示しているということが示唆されたといえるだろう。

他者受容と他の因子の相関をみたところ、全ての因子・尺度と弱いながら相関を示している。他者受容は直接的に何かと繋がり、共に高まるという役割は強くなく、他者を受容するということは広く、基礎的なものとして他者との関わりに関連しているのではないかと考えられる。しかし、すべての因子・尺度と相関関係は示したが、中でも本来感と「現状満足」との間の相関関係は非常に弱いもので、対象関係因子の中で他者受容と負の相関関係で係数の高かったも

のは「自己中心 (-.364)」と「関係希薄 (-.355)」の二つであった。このことから、親密な関係を持つ他者に対しては受容が高まることが考えられ、自身を中心的に考え、その対象をコントロールしようとするという傾向が低下すること傾向にあると考えられる。他者受容が高まる状態としては、他者との関係性を優先しやすいと考えられ、他者との関係性を継続するうえで自身を中心として現状のままであること優先するよりも、他者との関係性を保持する事を優先する傾向があるのではないかと考えられる。

「一体希求」は多くの因子間で相関関係を示さなかったが、「見捨不安」とは正の中程度の相関を示した。この関係性は「一体希求」の得点が高くてもものは、見捨てられることに不安を抱き、過剰に他者の行動に反応してしまう傾向があるためと考えられる。その他「一体希求」と正の相関を示したのは「自己中心」であり、上記のことに加え、「一体希求」の高いものは、他者と一体になりたいという願望を持ちながら、自己中心的に他者と関わっていることが示唆された。このことから、他者と一体になりたいと感じることは、自身の感覚を他者に共有してもらいたいという感覚があると考えられる。

自己受容の各因子に関して、相関関係で特徴的であると考えられるものは「望自己受容」である。「望自己受容」は自己受容因子のなかで「親和不全」との負の相関が最も高く (-.459)、自己受容因子の中では唯一「一体希求」と相関関係を示さなかった。望ましい自己を受容することは、他者との関係をスムーズに持つことができることと関連していることが示唆された。他者とスムーズに関係を持てるということは、通常、社会的には望ましい状態であると考えられるため、望ましい自己の一反として捉えている可能性が考えられる。自身に対し、他者との新しい関係を持つことや、他者と親しくなりやすいといった評価を持つこと自体が望ましい自己を受容しやすいという傾向との関連性がある可能性も考えられる。また、スムーズに他者関係を持てるものは、一人の他者に固執せず、広

く他者関係を持つことが出来ることと関連するということを示唆していると考えられる。

全体を通して対象関係との間での相関係の強さが本来感と最も共通した特徴を持つのが「望自己受容」であった。このことは、望ましい自己の受容を高くできるものが、多くの面で本来感の諸特徴と共通するという可能性を示唆していると考えられる。本来感と異なった部分の相関の特徴に関しては、自己受容の他の因子と合わさることでより多くの特徴が共通してくる。このことから本来感は「全体的自己受容」「望自己受容」「現状満足」の自己受容の包括的な特徴を持っているものであると考えることができるだろう。

3. 重回帰分析

本研究において、他者受容と自己受容は同様の役割を果たすものと考え、本来感・他者受容・対象関係がそれぞれ本来感に対して影響を与えているという仮説を立て、ステップワイズ法にて分析を行ったが、その結果、採択された因子・尺度は自己受容の3因子、対象関係因子の「親和不全」「自己中心」「関係希薄」の3つの計6因子であった。当てはまりは.555で、最も高い回帰係数を示したものは全体的自己受容であった。

自己受容はすべての因子が採択され、対象関係から採択された因子からの回帰係数もすべてが自己受容各因子よりも低いものとなった。相関関係を示さなかった自己中心も、対象関係の下位因子の中で採択される結果となった。

この結果は、自己受容と本来感は強い関係性を示しているという事を示唆していると考えられる。また、相関分析においては相関関係を示したものについても重回帰分析においては採択されなかったことから、擬似相関であったことを考慮し、今一度再考する必要があると考えられる。

因果関係を示した対象関係下位因子の中で「自己中心」のみ、正の回帰係数を示し、他者関係において、自分の思うように他者と接する

事が出来ることや他者に対してこうすべきである、こうしてほしいといった願望を抱くことは本来感を高めることに繋がっていることが示された。この結果から、他者と関わるうえで、自身がある程度他者との関わりにおいて優位に立ちたい、あるいは他者に自身の望み通りに動いてほしいという願望を持つことができるということも自分らしくあるということに繋がるという結果が示されたといえるだろう。

最も対象関係因子の中で高い回帰係数を示したものは-.149で「親和不全」であった。上述の「自己中心」や「親和不全」と同様に負の回帰係数を示した「関係希薄」を交え考慮すると、他者関係において、他者との間で自分自身が他者に対して願望を抱く、あるいは示しつつも、関係性は希薄にならないというような関係性を持っているもの、また、そのような関係性を作りやすいものが本来感を高く示すという可能性が示唆されたと考えられる。

自己受容の各因子については、それぞれが正の回帰を示し、相関でも示されたのと同様、包括的な自己受容が本来感を高めることに繋がる可能性が示された。その中でも最も高い回帰係数を示した自己受容は相関関係においても最も相関を強く示した「全体的自己受容」であった。「現状満足」と「望自己受容」は相関の強さは同程度であったが、回帰係数は「現状満足」が.263、「望自己受容」が.160と.10以上の差を有していた。このことから、本来感は自身を全体的に受容できるという状態と密接に関係しており、自身に対してこういったことが望ましい、と考える条件付きである自身の受容よりも、今現在の状態を受け入れられるかどうかといったことから影響を受けやすいと考えられる。また、最も回帰係数の高かった「全体的自己受容」に関しては、自分自身のネガティブな面を含めて受容できるかといった質問項目となっており、自身のポジティブな面・ネガティブな面の両方を受け入れることが出来ることが本来感により高い影響を与えていると考えられる。

Ⅶ. 総合考察

本来感に対し、自己受容の各因子が強い正の相関関係を示し、対象関係因子において比較的強い負の相関関係を示していたのは「親和不全」「関係希薄」「見捨不安」の因子であった。重回帰において有意であったものは自己受容の各因子と対象関係因子の「親和不全」「自己中心」「関係希薄」であった。上記のことから、多少のずれはあるものの、本来感と自己受容に関しては密接な関係があると考えられた。また、自己受容および対象関係との関係性を示すと思われた他者受容に関しては自己受容各因子・対象関係各因子ともに弱い相関関係にとどまっており、重回帰分析の結果においては採択されなかった。相関分析においては自己の受容・他者との関係性の両者に対し、同程度に低いながら関連を持っている可能性が示唆されたといえるが、重回帰分析では採択されず、擬似相関であった可能性が考えられ、他者受容が高まる事が直接的な因果関係は存在せず、自己の受容や他者と接する場面が増えること、あるいは他者との接触場面の単純な増加やその他多くの要因を含み、それらに付随し、高まっている可能性が考えられた。

清兼ら（2013）による青年期における自己受容・他者受容のバランスと発言抑制をみた研究では、他者受容の高いものは、相手のために発言をしないという行動が少なく、自身のために発言を抑えるといったことが示され、自己受容・他者受容の両者が低いものに比べ、自己受容の高いものは自身の言いたいことは言うという、発言抑制が低くなるということが示されている。また、同研究において発言抑制による精神的健康に影響があるかどうかといった検討もされており、コミュニケーション力の低さによる発言抑制が多いほど精神的健康度が低いという結果が示されている。このことから、対人コミュニケーションに関連すると思われる親和不全と他者受容・自己受容に関連があると考えら

れる。また、石原（2013）による思春期・青年期のける周囲の他者からの被受容感と本来感の関連をみた研究では、本来感は中学生・高校生・大学生のどの年代においても、全体的に高く受容されている感覚を持つものが有意に本来感が高くなっていると示されている。伊藤・小玉（2006）によって行われた本来感に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討において男性では友人との交遊やサークル活動といった対人的で社会的な営みと本来感が関連しているとし、女性においてはのみ会などでみんなと騒ぐといったことが本来感と関連しているとした。このようなことから、他者と接すること、その活動の形や、他者から受容されているということは本来感との関連があると考えられる。

以上のことから他者とのどのような関係性を持つか、その関係性においてどの程度自己受容・他者受容を行うかで関係性の形が変容していくということが予想される。様々な他者と新しく関係を持つことのできる「親和不全」の低いものは、多くの場面において、自身の価値観を再検討できる機会が多いのではないかと考えられる。多くの他者と触れ合う機会が多くなることは、価値観の合う他者との出会いの機会も多くなるといったことの他に、一人ひとりに対しての関係性の比重が下がってくるといった可能性が考えられる。多くの異なる他者との出会いと、自身と近い価値観を持ったものとの出会いは、他者との安定した関係性を構築しやすい環境にあり、安定した関係性において自己を受容し、自身と他者の両方を受け止め、他者と自己の違いを認めることに繋がり、自分自身が自分らしくあるという感覚につなげることが出来るのではないかと予想される。

他者を受容することは、関係性を作るに当たりある程度必要なものと考えられ、我を通すことや、関係性を築くことの両方に関連があると考えられる。本研究において他者受容から本来感に対して直接的な影響はみられなかったが、どの程度他者のありのままを受け止めることが出来るのかは自身の在り様と、他者との関係性

の両方に関連するものと考えられる。

外的な基準に囚われず自分自身に中核的に感じられる自分らしさとされる本来感であるが、自分らしさの形成という観点において、他者との関係性は存在していると考えられるだろう。

本研究においては、他者との関係性の安定および自己に対する受容が本来感と大きく関わっていたことが示されたといえるだろう。とりわけ、他者との関わりにおいては不安や緊張状態が本来感との相関を示していると考えられる。他者の存在が得難く、自己の中で失われやすいものであると感じられやすい場合、その存在を失わないために、いかに外部との繋がりを保つかを重視し、自己価値を外的なものに依拠させやすくなるのではないかと考えられ、自己の価値観や意義も外部に影響されやすいのではないかと予想される。他者との関係性が得やすく、失われにくいものであり、自身もその中で自己中心的に振る舞えていると感じられている場合には、他者関係を翻弄され、そこに注力していた分の力を自己の内界に向けることが出来ることから、自己の中に内的な価値基準が出来上がってくるのではないかと考えられる。本来感を構築していくことは、他者との関係性において自身の中にどの程度入り込むことが出来る機会に恵まれるのか、といったことにも関連しているのではないだろうか。

VIII. 今後の課題

本研究において、他者関係と本来感の関連を主にとりあつかったが、自己受容と他者受容が、それぞれどのような役割をもち、どのような場面においてより高められるかの精査と、その精査によって示されたものによる本来感の形成のさらなる細やかな対比・関連の検討がより本来感の形成の検討に有益であると考えられる。

本来感がどのように高められるか、どのよう

な影響を及ぼすかについては対人関係やストレスコーピング、内省などについても研究がなされてきており、近年では年齢別に研究されたものもあるが、他者関係や、周りとの状態に関して、ライフイベントや友人間でどのような問題があり、どのように解決をしてきたかなど、問題解決の行い方とも関係をしてくるのではないかと考えられる。他者との関係性のみにとどまらず、関係性の構築の手法や、そこに行きつくまでの経過を加えて対比をすることが出来ればより他者関係との密接な関わりがみえてくるのではないかと考えられる。

また、本研究においてはアイデンティティの形成と絡めて青年期を対象として研究を行ったが、更なる加齢によって本来感が高まるか、その年齢や、その年齢特有のライフイベント（就職・出産・子育て・介護など）とも関連があるか、また、その時期における他者との対比や関係性についての検討も自身の中核としての自分らしさをどのように構築していくのかを探ることに繋がるのではないだろうか。

付 記

本論文は2015年度提出の修士論文に加筆・修正を加えたものです。

謝 辞

本研究執筆にあたりご指導いただきました大矢泰士先生、副査をお引き受けくださいました溝口純二先生に深く感謝申し上げます。並びに、アンケート調査にあたり授業の貴重な時間を割き、ご協力くださった教授の方々、多くのご提案・助言・調査協力をくださった母校の指導教員・教授の方々、この場を借りて深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

また、アンケート調査にご協力くださった学生の方々、アンケートの調査実施に協力くださった同期院生の方々に深くお礼申し上げます。

文献

- Erikson, E. H. (1959) Identity and the Life Cycle. 小此木啓吾 (訳) (1973) 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房 130-133
- 石原由美 (2013) 思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連. 九州大学心理学研究, 14, 117-124.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005) 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討. 教育心理学研究, No. 53, 74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006) 自分らしくある感覚 (本来感) に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討. 健康心理学研究, Vol. 19, No. 2, 36-43.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 (2006) 日本における青年期用対象関係尺度の開発. パーソナリティ研究, Vol. 14, No. 2, 181-193.
- 清兼 渚・鈴木友美・五十嵐哲也 (2013) 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要. No. 4, 22-32.
- 益子洋人 (2010) 大学生の過剰な外的適応行動と内省傾向が本来感におよぼす影響. 学校メンタルヘルス, Vol. 13, No. 1, 19-26.
- 櫻井英未 (2013) 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係. 日本女子大学人間社会研究科紀要 No. 19, 125-142.
- 高木秀明・福森裕子・小沢一仁 (1986) 女子大学生の自我同一性 ——対人関係, 生き方, 自尊感情の面からの検討——. 日本教育心理学会総会発表論文集, No. 28, 342-343.
- 鶴田菜々・原口雅浩・重橋のぞみ (2015) 青年期の対象関係と自己表明行動に関する研究. 臨床心理学: 福岡女学院大学大学院紀要, No. 12, 73-79.
- 山田みき・岡本裕子 (2006) 現代青年の自己受容 ——自己による自己受容と他者を通しての自己受容の観点から——. 広島大学大学院教育学研究科紀要, No. 55, 339-348.